

機能不全家族の住宅空間と生活実態を捉えるための臨床心理学的実験
-生活空間投影法、家族関係単純図式投影法、写真投影法の試行実験-

Experiment for Analysing Dysfunctional Family House and Actual Life
by Using Clinical Psychological Method
-Trial Experiment of Living Space Projection, Family Relation Projection,
and Photo Projection Method-

○番場康太*1, 山崎俊裕*2
BAMBA Kota, YAMAZAKI Toshihiro

The aim of this study is to examine the possibility of adapting clinical psychological method to clarify the relation between house plan and actual life of Dysfunctional family. In this study we pick up several dysfunctional families and carry out three experiments. The first experiment is a Living Space Projection method, the second is a Family Relation Projection method, and the third is a Photo Projection method. Through these experimental studies, we confirm the possibility of adapting clinical psychological method.

キーワード：機能不全家族、臨床心理学、生活空間投影、家族関係投影、写真投影

Keywords : Dysfunctional Family, Clinical Psychology,

Living Space Projection, Family Relation Projection, Photo Projection

1. 研究背景・目的

我が国の家族形態は、今日、晩婚化や少子高齢化の進展、標準世帯の減少と母子父子家族の増加、単独世帯や高齢者世帯の増加、パラサイトシングルやDINKSの出現等、多様化する傾向にある。住宅の計画・設計者や住宅メーカーは、このような多様化する家族形態に対してこれまで様々な住宅形式やシステム提案を行ってきたが、今後より一層多様化・複雑化する家族形態に対して、個別解としての住宅計画・設計方法や供給のあり方が求められると考えられる。そのためには家族のライフスタイルや家族関係を詳細に把握し、将来的な変化を見据えることが重要な課題となるが、家族構成員の生活行動や意識の実態を捉えることは一般に困難であり、個々の家族構成員の心と対話する方法を模索・検討することが必要と考えられる。

そこで本研究では、家族関係と住空間に関わる問題が顕在化しやすいと考えられる「機能不全家族」の住宅と

家族構成員を研究対象に取り挙げ、臨床心理学的実験として生活空間投影法、家族関係単純図式投影法、写真投影法の3つの方法を試行することにより、研究対象の具体的な家族構成、住宅平面形式、生活空間、家族関係等の特徴を明らかにし、これらの実験方法の可能性を検討することを目的とした。

2. 関連する既往研究と本研究の位置づけ

住宅と家族関係を取り扱った既往研究や文献は複数存在するが、機能不全家族の住宅に着目した研究事例は少ない。外山は昭和50年代後半に心理学者と連携して8人の登校拒否児の住空間と住まい方に関するヒアリング調査を実施し、住宅平面の分析から居間と子ども室の配置、子ども室を与える時期等が登校拒否児の親子関係に一定の影響を及ぼすことを明らかにしている^{*1)}。また精神分析学的方法を建築計画・設計に試みた研究事例として、岡崎・伊藤は箱庭療法と風景構成法を改良した建築模型を用いた居住空間構成法を考

*1 東海大学工学研究科修士課程

*2 東海大学工学部建築学科 教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Eng., Tokai University

Dr. Eng., Prof., Dept. of Architecture, School of Eng., Tokai University

案し、被験者の居住空間構成プロセスや生成空間の特徴を分析・考察することにより、精神病院計画・設計の知見を得ている^{文2)}。心理学や社会学の分野では、家族の人間関係や心理的距離等を図式化する方法として家族関係単純図式投影法、家族イメージ法、Family System Test等が考案されている。家族関係単純図式投影法(以下、家族関係投影法)は家族関係を視覚的に把握・測定する方法として1981年に水島により考案された方法であり、草田は被験者を用いた実験からこの方法の可能性を確認している^{文3)~文4)}。また茂木は多様な家族に対してこの方法を適用し、手法としての有効性を確認する継続研究を行っている^{文5)~文6)}。小林は大学生の自宅の住宅平面形式と家族関係についての調査から、住宅各室のしつらえの決定者=場の支配者として、父支配タイプ、母支配タイプ、両方支配のタイプ等、複数の支配形態があること、これらのタイプが住宅の平面形式・間取り等と密接に関係すること等を明らかにしている^{文7)~文9)}。また魁生は中高生の日常生活における家、学校、地域の居場所の実態と構造を明らかにするため、家族関係投影法を改良した生活空間投影法を考案し、児童館や子どもセンターに通う中高生を被験者とした実験から中高生の居場所の実態を明らかにし、臨床心理学的方法としての生活空間投影法の可能性を確認している^{文10)}。また野田はこどもの心の内面フィルムに投影された住まいと環境を捉える方法として、ポケットカメラを用いた写真投影法を考案し、こどもの心と対話する方法として写真投影法が有効であることを報告している^{文11)}。

本研究では以上のような関連研究の方法を参考にしながら、機能不全家族の住宅空間と生活実態を捉える方法として、魁生による生活空間投影法、草田・茂木らによる家族関係投影法、野田による写真投影法を用いた臨床心理学的実験を行った。

2. 機能不全家族の概念と実験対象家族の概要

1) 機能不全家族の概念について

機能不全家族の概念を厳密に定義することは一般に困難であるが、西尾は機能不全家族の具体的な事例を著書の中で紹介している^{文12)~文13)}。西尾によれば機能不全家族とは、家庭内不和、虐待、依存等があり、子育て、団欒、地域との関わり等、本来家族に存在すべき機能が健全に機能していない家族と定義される。また笹野・塚原は西尾の紹介事例をもとに、機能不全家族の基準を表-1に示す13項目に整理している^{文14)}。本研究ではこの基準に従って実験対象家族の分類・整理を試み

た。

2) 実験対象家族の概要

こどもは一般に成育過程において住環境や家庭環境から様々な影響を受けるが、機能不全家族では特にこどもにいろいろな問題が顕在化すると考えられる。

そこで本研究では機能不全家族構成員であるこどもを主に被験者に選定し、協力が得られた場合は父母も併せて実験を行った。実験対象家族は新潟県・東京都・神奈川県・埼玉県・山梨県に在住する合計32事例(機能不全家族13、健全家族19)で、機能不全家族の判断は被験者自身の申告をもとに分類・整理した(表-2)。本報告では実験対象家族32事例中、表-1の機能不全家族の基準に3つ以上当てはまる4事例を選定し、分析・考察を行った。

3. 実験概要

1) 生活空間投影法(実験A)

本実験は被験者の住宅を中心とした日常生活の行動と居場所の関係を捉えることを目的として行った。

生活空間投影法は、同心円上の円の中心から好きな場所・空間の駒を順に配置してもらう方法であるが、本研究で行ったプレ調査で機能不全家族は住宅内に好

表-1 機能不全家族の基準

- ① 親がアルコールなどの依存にとりつかれている家庭
- ② よく怒りが爆発する家庭
- ③ 冷たい愛のない家庭
- ④ 身体的・性的・精神的虐待がある家庭
- ⑤ 他人や兄弟姉妹といつも比べられる家庭
- ⑥ あれこれ批判される家庭
- ⑦ 期待が大きすぎて何をやっても期待にそえない家庭
- ⑧ 仕事・いい学校・お金だけが重視される家庭
- ⑨ 他人の目を気にする表面だけ良い家庭
- ⑩ 親が留守がちな家庭
- ⑪ 親と子の関係が反対になっている家庭
- ⑫ 両親の仲が悪い・ケンカの絶えない家庭
- ⑬ 嫁姑の仲が悪い家庭

表-2 調査・実験対象家族の概要

名称	所在地	家族人数	被験者	住宅形態	当てはまる基準
DF1	新潟県	4→3	長男/次男/母	4LDK戸建住宅	⑤/⑩/⑫
DF2	新潟県	5→4	次女	2K集合住宅	③/⑩/⑫
DF3	新潟県	4	長女	2LDK集合住宅	⑩/⑪/⑫
DF4	新潟県	5→4	父	5LDK戸建住宅	⑨/⑩/⑬
DF5	埼玉県	5→4	長女	5LDK戸建住宅	③
DF6	新潟県	4→3	長女	2LDK集合住宅	⑫
DF7	東京都	4	長女/母	1K集合住宅×3	⑬
DF8	山梨県	4→3	次男	4LDK戸建住宅	①/⑩
DF9	新潟県	5→2	長女	6DK戸建住宅	⑩/⑫
DF10	新潟県	8	長男/長女	7LDK戸建住宅	⑬
DF11	新潟県	5	母	4LDK戸建住宅	③
DF12	東京都	4	長女	2DK戸建住宅	⑫
DF13	東京都	3	長男	1DK戸建住宅	①

健全家族19家庭(新潟県下越地方8、東京都4、神奈川県5、埼玉県2)

※家族人数の→は離婚前の人数から離婚後の人数を表している

きな場所・空間がないことが複数みられたため、滞在時間が多い順に配置してもらおうよう指示した。

実験方法・手順、指示内容は以下のとおりである。

- ①被験者の家族構成員(属性・性別・年齢等)を記入
- ②被験者の自宅平面図の提供依頼(図面がない場合、被験者に確認しながら間取り図作成)
- ③実験主旨の説明^{注1)}
- ④住宅内、及び住宅外で滞在時間が多い場所・空間を小片紙(駒)に記入
- ⑤同心円の中心から滞在時間が多い場所・空間の駒を順に配置(離婚等がある場合、離婚前の生活も回想)^{注2)}
- ⑥これと自宅平面図(間取り図)とを照らし合せ、並べられた場所・空間の滞在理由、滞在行动、滞在頻度、滞在者、家族とのコミュニケーション量、居場所の有無等についてヒアリング
- ⑦出来上がった図の写真撮影
- ⑧ヒアリング情報をもとに生活空間投影図を作成し、分析・考察を行った(図-1)。

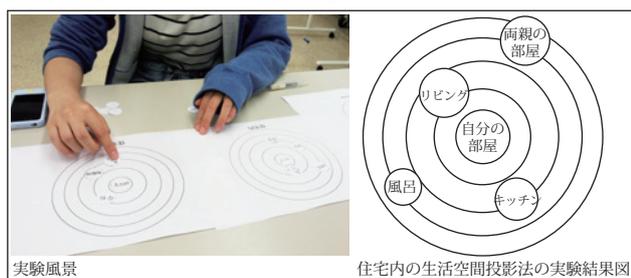


図-1 生活空間投影法の実験風景と実験結果図

2) 家族関係投影法(実験B)

本実験は機能不全家族構成員相互の人間関係を捉えることを目的として行った。

実験方法・手順、指示内容は以下のとおりである。

- ①実験主旨の説明^{注3)}
- ②小片紙(駒)を家族の人数分配布し、被験者との続柄をそれぞれ記入^{注4)}
- ③家族構成員相互の関係(現在の家族像^{注5)}、離婚がある場合は離婚前の家族像^{注6)}、理想の家族像^{注7)}の3種類の配置図(家族関係投影図)の作成
- ④最終的な家族関係投影図をの写真撮影
- ⑤3種類の家族関係投影図をもとに家族関係の具体的状況についてヒアリング
- ⑥家族関係投影図の分析・考察を行った(図-2)。

なお、草田は家族間の勢力関係や階層性の評定が困難な場合、家族構成員を表す駒の大きさを自由に変更してもよいこと、また個人や家族にとってペットが重要な存在である場合には、ペットを家族構成員の一員

に加えて家族関係を図式化させてもよいと述べていることから、本実験でも一部の被験者については駒の大きさを変えて実験を行い、家族関係投影図を表現している。

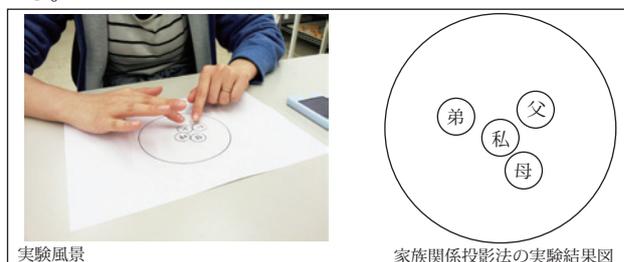


図-2 家族関係投影法の実験風景と実験結果図

3) 写真投影法(実験C)

実験A、実験Bの試行から、機能不全家族は住宅内に「好きな場所」、「落ち着く場所」がないことが複数みられた。そこで機能不全家族構成員が心理的にどのような場を求めているかを把握するため、写真投影法による実験を行った。ここでは被験者に「好きな場所」、「落ち着く場所」をデジタルカメラで自由に撮影・写真選定してもらい、その理由についてもヒアリングを行った。

4. 機能不全家族の住宅平面、生活空間投影、家族関係投影、写真投影に関する事例分析

1) 事例1 (DF1) : 長男・次男・母への実験結果

図-3は表-2のDF1の家族構成、住宅平面形式、長男・次男・母に対する生活空間投影図(離婚前)、家族関係投影図、写真投影法の実験結果を示したものである。住宅平面形式は家族の共有空間であるLDKを通らずに各自が私室に行ける間取りとなっている。また生活空間投影図をみると、長男・次男・母はいずれも在宅時にリビングで多くの時間を過ごしていることがわかる。一方、長男へのヒアリングによると父は家を不在にすることが多いが、在宅時は1階和室で専ら1人であることが判明した。これらのことから長男・次男・母と父とは日常生活においてコミュニケーション量が極めて少ないことがわかる。また長男・次男・母の作成した家族関係投影図(離婚前)をみると、3つ全ての図において父と母の駒が対極にあり、父と母の距離が大きかったことがわかる。長男の家族関係投影図では、長男を中心に父、母、弟が接する配置になっている。また次男・母の家族関係投影図でも長男の駒にそれぞれが接する配置になっていることから、家族関係は主に長男を媒介として保たれていたことがわかる。写真投影法の結果では、長男の「好きな場所」「落ち着ける

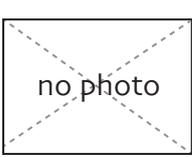
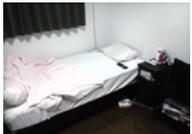
家族構成	住宅平面形式 (間取り)	生活空間投影図 (離婚前)	家族関係投影図	写真投影
DF1 離婚時 ・父 (47) ・母 (42) ・長男 (18) ・次男 (15) 調査時 ・母 (45) ・長男 (21) ・次男 (18) 適用基準 ・⑤ ・⑩ ・⑫	2F 次男の部屋 長男の部屋 WC クローゼット 母の部屋 ベランダ 1F キッチン ダイニング 脱衣所 リビング 風呂 押入 WC 押入 床の間 和室 父の部屋	長男の実験結果 寝る時 自分(長男)の部屋 寝るため 勉強、TV 週6 電車、車 学校行くとため 学校から帰るため リビング 家にいる時のほとんど 週1~2 従兄弟の家 話す人が多い 遊ぶため 週6 学校 学校だから 滞在行動・理由 ご飯を食べるみんながいるから 自分が家族仲を調節できるから 自分がいれば喧嘩がおきないと思ってたから	離婚前の家族像 現在の家族像 理想の家族像 ※長男が小さな駒だと家族関係を表現できないと申告したので、長男に自由に表現させた	 従兄弟の家の事務所。ここには常に人が集まっていて話ができ楽しいから好き。
		次男の実験結果 たまに 寝るとき 自分(次男)の部屋 たまに 寝るため ゲーム 勉強 たまに 友達の家 遊びたいから リビング 食事 TV PC 週7 野球 週5 学校	離婚前の家族像 現在の家族像 理想の家族像	 no photo 離婚前は特に好きな場所はなかった。
		母の実験結果 寝るとき 自分(母)の部屋 寝るため 仕事帰り スーパー 買い物 毎日掃除のとき 母の他の部屋 掃除のため リビング 食事 PC TV 平日 職場 休日 デパート 買い物	離婚前の家族像 現在の家族像 理想の家族像	 自室のベット 寝れるから落ち着く。

図-3 DF1の家族構成、住宅平面形式、生活空間投影図、家族関係投影図、写真投影法

家族構成	住宅平面形式 (間取り)	家族関係投影図 (次女)	写真投影法 (次女)
DF2 離婚時 ・父 (40代) ・母 (40代) ・長女 (10代) ・長男 (10代) ・次女 (10代) 調査時 ・母 (50代) ・長女 (20代) ・長男 (20代) ・次女 (19) 適用基準 ・③ ・⑩ ・⑫	居間 (2) 居間 (1) 6畳 6畳 風呂 脱衣所 台所 WC	離婚前の家族像 理想の家族像	 海 ぼ一つとできて何も考えなくてもいいから落ち着く。  河川敷 ぼ一つとできて何も考えなくてもいいから落ち着く。

場所」としては、人が集まって楽しいという理由で「従兄弟の家の事務所」が挙げられていた。従兄弟の家は生活空間投影法でも滞在時間が多い場所・空間として挙げられており、長男の生活において重要な場所であったことが読み取れる。一方、次男にはこのような場所がないことが判明した。

2) 事例2 (DF2) : 次女への実験結果

図-4は表-1のDF2の次女に対する実験結果を示し

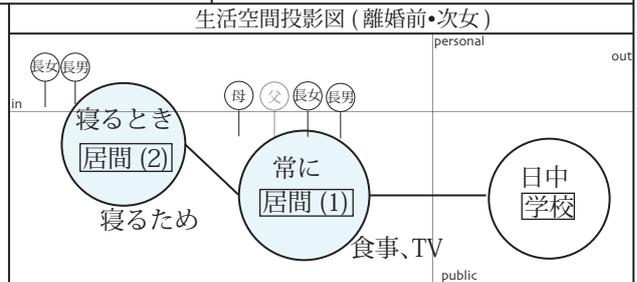


図-4 DF2の家族構成、住宅平面形式、生活空間投影図、家族関係投影図、写真投影法

たものである。住宅平面形式みると、6畳2間の間仕切りを取り払って12畳ワンルームとし、居間(1)は食事と父母の寝室、居間(2)は長男・長女・次女の寝室として使用されている。ここでは家族人数5人に対して部屋の大きさが狭く、私室の確保と食寝分離・就寝分離が実現できない状況である。生活空間投影法のヒアリングからも家族5人分の荷物・家具等で生活空間が極端に狭い状況にあったことが判明した。また、生活空間投影図(離婚前)をみると、父は家を不在にすることが多いことがわかる。次女の家族関係投影図(離婚前)では、父は家族の枠線外に置かれており、父と他の家族構成員との距離が相対的に大きかったこ

とが読み取れる。写真投影法の結果では「好きな場所」「落ち着ける場所」として海や河川敷が撮影されており、開放的な広い空間で一人になれる場所を求めていたと考えられる。

3)事例3 (DF3) : 長女への実験結果

図-5は表-1のDF3の長女に対する実験結果を示したものである。家族構成は母方の祖母と暮らす4人家族、住宅平面形式は一般的な2LDKの団地で、LDKの一角の和室を父と母の寝室として利用していた。生活空間投影図(離婚前)とヒアリングから、父が在宅時、長女は自室に閉じこもり一人であることが多いことが判明した。家族関係投影図(離婚前)では父の駒は家族の

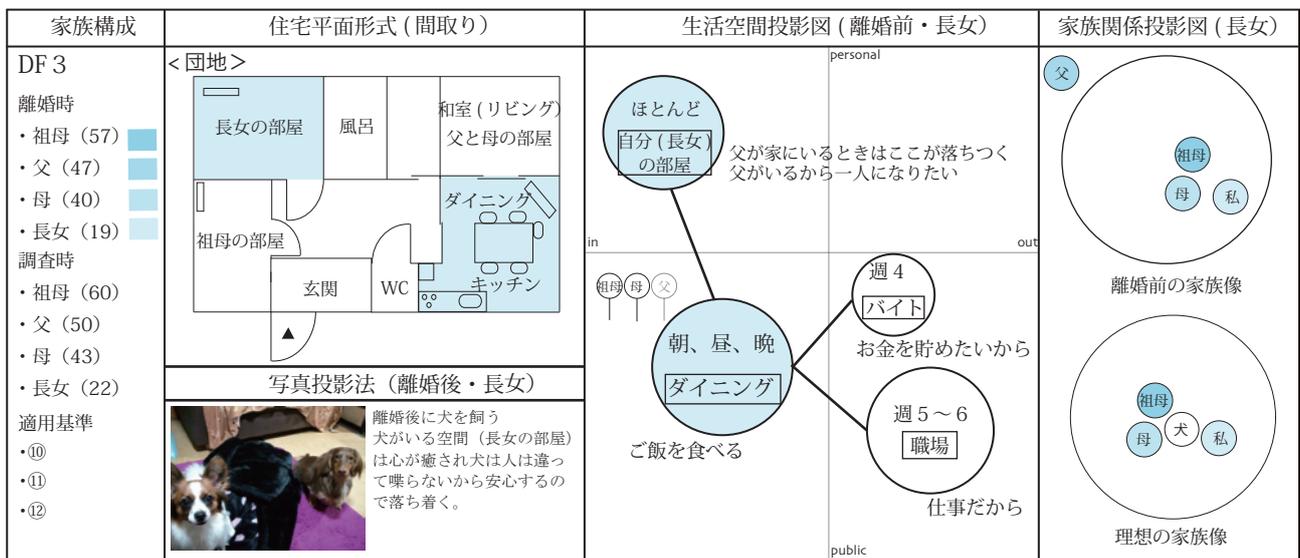


図-5 DF3の家族構成、住宅平面形式、生活空間投影図、家族関係投影図

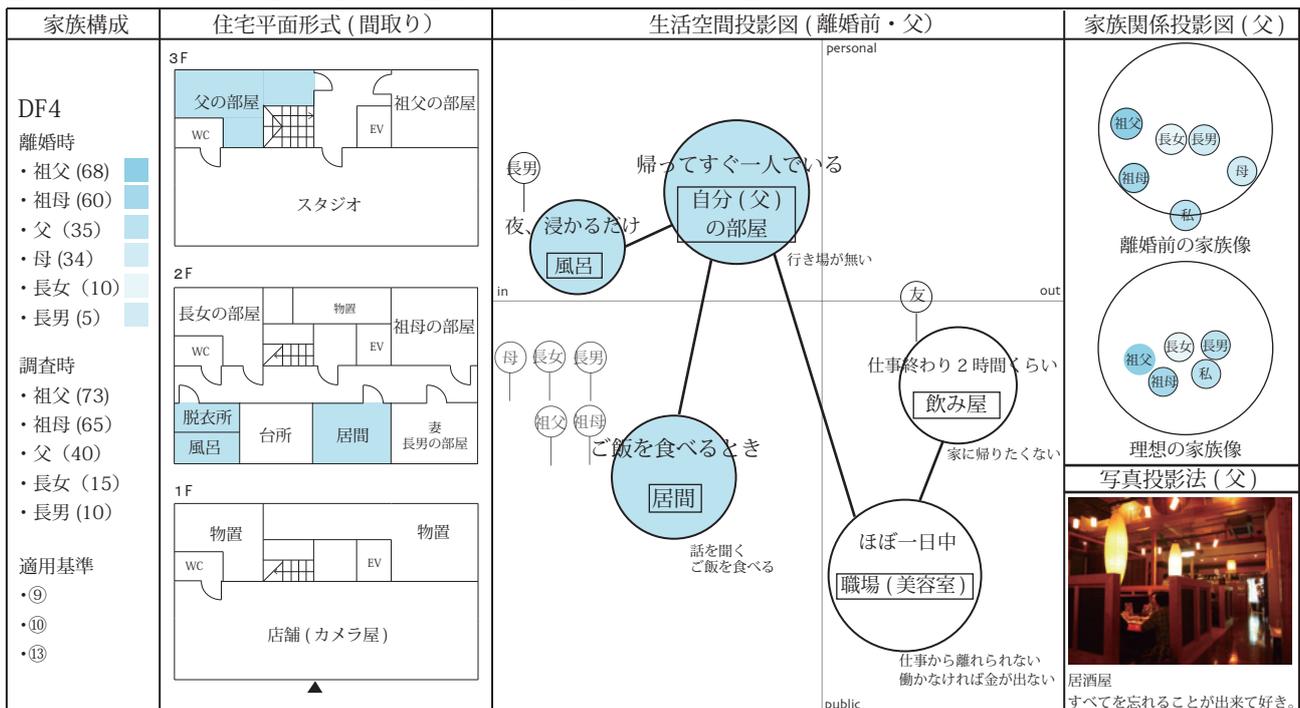


図-6 DF4の家族構成、住宅平面形式、生活空間投影図、家族関係投影図

枠からはみ出しており、この家族でも父と他の家族構成員との距離が大きかったことがわかる。なお、この家族は離婚後も経済的理由で父が同居し、望ましい生活スタイルとはいえない状況が継続していることも判明した。写真投影法の結果では、離婚前の長女の「好きな場所」「落ち着ける場所」は無かったが、離婚後は犬を飼い、犬がいる空間を落ち着ける場所として挙げられていた。

4) 事例4 (DF4) : 父への実験結果

DF1~3の事例はいずれも父親と他の家族構成員との距離が大きく、父の日常生活や住宅内の居場所を把握することが計画上の要点であることが明らかとなった。そこでここでは、図-6に示すように表-1のDF4の父に対する実験結果を示した。家族構成は父方の祖父母と二世帯で暮らす6人家族、住宅平面形式は中廊下型3階建5LDKで、離婚前は2階が女性の個室、3階が男性の個室という形で階ごとに性別のゾーニングが行われていた。生活空間投影図(離婚前)から父は家にいる機会が少なく、長男との入浴時間以外は他の家族と交流がほとんどないことが判明した。家族関係投影図(離婚前)では祖母と母を対極に置き父の駒を家族の枠線上の間に配置していることから、父が祖母と母との間を取り持つ関係にあることが読み取れる。写真投影法の結果では、父が「好きな場所」「落ち着ける場所」として、すべてを忘れることができ好きであるという理由で「居酒屋」が挙げられていた。居酒屋は生活空間投影法でも滞在時間が多い場所・空間に挙げられており、父の生活において重要な場所であったことが読み取れる。

5. 本研究のまとめ

本研究では機能不全家族を実験対象に選定し、生活空間投影法、家族関係投影法、写真投影法という3つの臨床心理学的実験から、実験対象家族の住宅平面形式、日常の生活空間と行動、家族関係、住意識等の実態や問題点等を明らかにし、これらの実験方法の可能性について検討した。

本研究で得られた結果をまとめると、以下のとおりである。

1)生活空間投影法は、住宅平面構成(間取り)やヒアリング情報等を相互に対応させることで、家族構成員の日常生活行動、住宅内外の居場所、日常生活における家族のコミュニケーション状況等を空間図式として捉えることが可能である。

2)家族関係投影法は、家族構成員相互の心理的な距離や関係性を視覚的に捉える方法として有効であると考えられ、複数の家族構成員への実験を行うことで家族関係をより詳細に捉えることが可能になる。また生活空間投影法の実験結果を併せて分析・考察することにより、住宅平面形式と家族構成員の生活行動実態、家族関係の状況等を総合的に評価・診断することが可能になると考えられる。

3)写真投影法は、家族構成員が有する潜在的な心の要求、すなわち心理的に望む「好きな場所」「落ち着ける場所」等を捉える方法として試行する価値があると考えられる。

■注釈

○生活空間投影法(実験A)に関する指示文

注1)「これからお願いすることは、住宅を中心とした日常生活の行動と居場所の関係を捉えることを目的としたものです。」

注2)「住宅内と住宅外のそれぞれの台紙に滞在時間が最も多い場所・空間の駒を同心円上の中心に配置し、滞在時間が多い順にその他の駒を同心円上に配置させてください。」

○家族関係投影法(実験B)に関する指示文

注3)「これからお願いすることは、家族構成員相互の人間関係を捉えることを目的としたものです。」

注4)「直径12cmの家族の枠を表す円が描かれたB5判の台紙上に、家族構成員を表す一円玉大の円形駒を用いて家族の関係を表してください。」

注5)「台紙上の円を家族とみだてて、家族の関係が気持ちの上で実際にどうなっているか表してください。」

注6)「当時の様子を思い返しながら家族の関係が気持ちの上で実際にどうなっていたか表してください。」

注7)「こうであつたらいいなという理想の家族関係を表してください。」

■参考文献

文1) 外山知徳：登校拒否児の住生活における空間機能の記号論、日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.1181-1182, 1983.9

文2) 岡崎甚幸, 伊藤達彦：居住空間構成法と分裂病者, 日本建築学会計画系論文報告集, 第436号pp.127-137, 1992.6

文3) 草田寿子：家族関係単純図式投影法の基礎的研究-家族関係査定法としての可能性-, カウンセリング研究, Vol. 28(1), 21-27, 1995

文4) 草田寿子：家族関係単純図式投影法-家族アセスメントの視点から-, 人間科学研究, 文教大学人間科学部, 第24号, pp.5-10, 2002

文5) 茂木千明：家族関係単純図式投影法による健康な家族関係-予備的研究-仙台白百合女子大学紀要, 第1号, 135-143, 1997

文6) 茂木千明：家族図式による現実と理想の家族関係の比較-家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から-

文7) 小林秀樹：現代住居における場の支配形態 住居における生活領域に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集, 第468号pp65-74, 1995

文8) 小林秀樹：住宅の平面型と「場の支配」の対応構造-住様式の領域論的研究・その2-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州), 1989

文9) 小林秀樹：居住者の回想と「場の支配」の対応構造-住様式の領域論的研究・その3-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(中国), 1990

文10) 魁生知佐子：中高生が集う都市施設の機能構成と使われ方事例に関する調査研究, 東海大学大学院修士論文, 2002

文11) 野田正彰：漂白される子供達-その眼に映った都市へ-, 情報センター出版局

文12) 西尾和美：共依存症の精神療法, こころの科学, 59, 39-44, 1995年5月

文13) 西尾和美：機能不全家族-「親」になりきれない親たち-, 講談社+α文庫, 2005.5

文14) 笹尾友寿・塚原貴子：大学生の精神保健に関する研究-機能不全家族とアダルト・チルドレン-, 川崎医療福祉学会誌Vol. 8 No. 1, 1998年47-53